

「生への選択」と希望の道

— 『二十一世紀への対話』 出版40周年に寄せて —

吉澤 五郎

はじめに — 「逆光の真理」として

今日は、大変由緒ある創価大学にお招き頂きまして、また崇高な「人間教育」のメッカである「創価教育研究所」主催の講演会とのことで、まことに光栄に存じます。まず、本題の幕開けのまえに、このたびの講演会の発端と申しますか、私なりの基本的な立場について一言触れておきましょう。

じつは、昨年春に貴学を表敬訪問したことがあります。やや遅きに失した感もありますが、その折に馬場善久学長および浅山龍一文学部長ともお目にかかり、早速本部棟の正面を飾る「トインビー記念展」をご案内いただきました。まさに、世界に誇りうる「文化遺産」とも申せましょう。その後、懇談会の席上では、親しく親日家トインビーの面影をひもとく楽しい機会ともなりました。とくに、世界的な関心を誘った『二十一世紀への対話』（A. J. トインビー—池田大作対談集、日本語版・1975年）も大きな話題となりました。

馬場学長のお話では、今日でも同書を授業のテキストに使用しているとのことで、大変頼もしく思いました。もとより、かつてトインビー文献は、多くの大学で「英文テキスト」として採択され、その花形ともなりました。さらに、来年は同書の「出版40周年」を迎えるとの朗報もうかがいました。早速、その佳節を祝う一連の「記念行事」案も浮上し、私も心躍る思いで「大いなる期待」を託したことでした。きつと、本日の講演会も、図らずもその一環としてお鉢が回ってきたのでしょうか。いま、その事の顛末と申しますか、わが身に降りかかる重い責務を感じています。

もう一点、これからお話する私の個人的な立場についても、あらかじめ触れておきましょう。申すまでもなく、本日の主題となる『二十一世紀への対話』は、世界的に著名な歴史家であるアーノルド・J. トインビーと、東洋の名高い仏法者で創価大学の創設者でもある池田大作氏との異色対談を収めたものです。すでに、皆さんはいち早く手にとり、きっと熱い思いで読まれたのではないのでしょうか。ところで、これまで本書に対するまなざしは、どちらかといえば池田氏に趣をおいた論評が圧倒的に多い。それは、やはり同じ日本人と申しますか同門のよしみとして、またとくに創価大学に学ぶ皆さんにとっては至極当然のことでありましょう。そこで、今日はや

や趣向を変えて、あえてもう一人の対談者・トインビーの側から「本書」に光をあててみたい。いわば、一筋の「逆光の真理」として、まだ未踏の世界をも訪ね、新たにトインビーの道案内と未来世代へのメッセージをお届けできたらと考えます。

I. トインビーの肖像 — 「ここに人間がいる」

トインビーの魅力 — 「自己超克」の精神

では、ここで本題に移りましょう。本日の講演テーマですが、とくにその主題は「『生への選択』と希望の道」としております。ちなみに、『二十一世紀への対話』の英語版（1976年）のタイトルは、じつはトインビーの発意によるものですが、かの『旧約聖書』（申命記、30 - 19）に由来する「生への選択」（CHOOSE LIFE）です。その原意は、あまねく天地を証人として、私たち人間の「生と死」および「祝福と呪い」の選択を問うものです。この和・英の両者に冠せられる表題は、いずれも東西の古聖が人類史の命運を案じた「黙示録」や「末法思想」の靈感を秘めるかのようです。

いわば、今日の病める「人間と文明」にたいする根源的な苦悩を刻み、私たち自身の新たな「生への選択」と「希望の道」を問いかけている。ご存知のように、かつて世界的な画家ポール・ゴーギャンが描いた最高傑作は、いみじくも「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか」と問いかけています。その象徴的な画題にひそむ「精神的な遺言」が、いま身近によみがえり、新たな重みをもって時代の転換を照らしているともいえましょう。

なお、今日の講演については、一応お手もとの「レジュメ」にそって進めてまいります。まず全体の章立てとして、大きな「三つの論点」を掲げております。第Iは「トインビーの肖像—ここに人間がいる」と題しております。折にふれ、よくトインビーには「人の心を打つものがある」あるいは「新しい眼を開くものがある」などといわれます。およそ、これまで「偉大な歴史家」と目される人びとは、たんに学問的な業績だけでなく、その人となりと思いの魅力について語りつがれることが多い、といえましょう。申すまでもなく、歴史学とは「一つの人間学」であり、その歴史を学ぶということは、つまるところ人間の豊かな感性や判断力を土台にしています。そのような人格的な基盤の上に立ってこそ、はじめて卓抜な歴史的知見と叡智が蘇るのでしょうか。その意味で、トインビーの「人と思想」の魅力とは何か。ここに、その中心点を大づかみに素描しましょう。

トインビーの世界観 — 「西欧的な思惟」をこえて

私は、これまでトインビー像のおもな特徴として、つぎの三点をあげています。それは、第1に「世界史的な視野」です。その世界観は、何よりも人間の歴史を一つの全体像として眺め、明日の人類文明のゆくえを問うものです。自ら語るように、彼の記念碑的な大著『歴史の研究』の構想も、まだ「木を見て森を見ない」という歴史家の習性を、新たに全体的な「森の観察」に導くことにあったのです。いわゆる、21世紀の全人類を結ぶ「新しい世界史」への開眼です。第

2に「自己偏見の克服」です。これまで、人類史上の営みには、不幸にもさまざまな偏見が付着しており、とくに人種差別は全面的に人間性を否定する最悪なものです。トインビーは、自ら「たまたま西欧人に生まれたに過ぎない」との自省から、自己の内部に巣くう「西欧的な思惟」の克服に終生身を捧げたともいえましょう。いわゆる、知的良心をかけた自己超克の精神です。

さらに、第3に「弱者への共感」です。一般の常識的な見方では、虐げられ抑圧されたものは社会的に無力であり、とるに足らない存在として無視されるのが通例でしょう。しかし、トインビーは、つねに歴史の勝者でなく、むしろ敗者の側から苦悩の創造的な意味を明かしてきました。ちなみに、トインビーが人生訓として好んだ言葉は、古代ギリシアの詩人・アイスキュロスの「悩みを通して智はきたる」でした。いわゆる、人間の深遠なる内面的価値への希求です。

このようなトインビー思想の特徴は、自ら告白するように、主著『歴史の研究』を導く原動力ともなりました。その象徴的な一文は、日本語版として刊行された『歴史の研究—縮刷版』（サマヴェル版、1956年）の「序文—著者の言葉」に見ることができましょう。あらためてトインビーの魅力をひもとくとき、その身をもって主体的に対決し、人類史の試練とゆくえを静かに語りかける思想と行動は感動的です。きっと、明日に生きる人生の糧となり、新たな希望の光となるでしょう。いま、トインビーの肖像として、とりわけその愛と誠実の深みにおいて、さらに言葉の真なる意味で「ここに人間がいる」との新たな感慨がつのります。

トインビー批判の検討 — 「賛否両論」の波紋

ところで、トインビーの知的肖像は、とくに伝統的な近代歴史学の明暗を通して解明すべきでしょう。皆さんも、すでに「近代歴史学の父」とされるドイツの歴史家・ランケのことはご存知でしょう。そのランケが言明するように、歴史学は「それが本来どうであったかをたんに示すだけ」でよいのでしょうか。いわゆる、後続の「悪しき歴史主義」の進行は、歴史学をたんなる「収集学」と化し、歴史家は「史料の囚人」として幽閉される身ともなりました。ここに、歴史学が生の問題関心から離れ、自ら「歴史のための歴史」として墓穴を掘る運命をたどることになります。

トインビーは、この伝統的な近代歴史学に対する反省と超克を目ざしたのです。その基本目標は、世界史的な立場にたつ「全体としての歴史」の探究と、現実的な連関性としての「生きた歴史学」への参与です。このような、新しい歴史研究の芽生えは、一部の歴史的修正や再構築というよりも、むしろ新知としての「比較文明学」の誕生をうながすことになりました。トインビーは、その壮大な比較文明学の体系を築いた先駆者ともいえましょう。じじつ、彼は、人類文明史を広く鳥瞰し、その全体論的な視野から諸文明の相互理解と共生の道を考究しています。とりわけ、これまでの伝統的な偏見や自己中心性をこえ、いわれのない憎悪を和解に導きながら、全人類共通の知的基盤を築こうとしたのです。トインビーの心情をうかがえば、その意味で「歴史家は、まだなすべきことをしていない」と映ったのでしょう。

他面、新たに登場するトインビーの文明史学は、いわば既成の歴史学との断絶をみることから、

多くの批判を浴びる事態ともなりました。欧米の歴史学界や専門史家の間でも、長らく「賛否両論」の論戦が飛び交うこととなります。その評価上の大きな対立は、むしろ学問的な問題性の大きさを告げるのかもしれない。一般の論調は、おおむねトインビーに対して風あたりが強い。しかも、冷淡で否定的であったともいえましょう。いわゆる、従来の科学的な性格を重視する歴史学の逸脱として、また歴史叙述に理念をもちこむ方法論への懐疑があります。

ちなみに、トインビー批判にみる最大の眼目は、一種の「宗教偏重」ということです。いわゆる、歴史の形而上的な解釈として、他ならぬ神の意図を読みこむ「一種の神義論」と指弾されたりします。ここでは、深入りできませんが、真正なトインビー理解のためには、やはり彼が登場する歴史的な必然性や、その判断上の価値基準を見きわめることが重要です。申すまでもなく、既成の価値規範に留まれば「否定的」となり、他方の新しい価値志向に挑めば「肯定的」となるでしょう。かかるトインビー批判の幕間にも、時として「真に問題性をもつ、非正統的な歴史家」の命運を垣間みる思いもします。

トインビーの再評価 — 「真の世界人」として

トインビーは、1975年に、その86年にわたる生涯を閉じました。早速、母国イギリスの高級紙「ザ・タイムズ」は、異例ともいべき長文の追悼文を掲げて「人類史の根本問題に対する深い洞察」という賛辞を贈っています。同様に「オブザーバー」紙も、「『真の世界人』と名づけるにふさわしい唯一の歴史家」として、その名誉を讃えております。一方、親日家として名高いトインビーだけに、日本の主要紙はこぞって第一面に訃報を掲げました。たとえば、各々に「世界的に著名な歴史学者の死」（朝日新聞）、「『東西文明融合の英知』逝く」（毎日新聞）、「永久に残る精神」（読売新聞）との見出しをつけて、その偉業をしのびました。

その後、間もなく「トインビー生誕100周年」（1989年）を迎えました。彼にゆかりの深い各地では、一連の記念行事や追悼論集の刊行が行われました。たとえば、アメリカ歴史学界の重鎮として、トインビーとも親交の深い W. H. マクニールがいます。彼は、長大な伝記『アーノルド・トインビー—その生涯』（オックスフォード大学出版局、1989年）を著し、トインビーを「20世紀のもっとも注目すべき思想家」と評しています。また、カナダでは、著名な歴史家グループを中心に『トインビー再評価』（C. T. マックインタティア、M. ベリー編、トロント大学出版局、1989年）が出版されました。とくに同書は、トインビーを「人類文明の総合的な世界史」を試みた畏敬すべき歴史家として、その多大な業績の再評価をせまるものです。とりわけ、未来をになう若い世代の関心と継承を念じたものです。

他方、日本でも、トインビーの「祝福と期待」をうけた「トインビー・市民の会」（秀村欣二代表、現「トインビー・地球市民の会」）の主催によって、独自の多彩な記念事業が行われました。まず、トインビーの令息ローレンス・トインビー（画家）夫妻等を迎えた「人間と文明・国際フォーラム」（1989年）が東京で開催されました。その後、舞台をアジアの韓国、中国、ヴェトナムに移した「トインビー・アジアフォーラム」（1989-91年）も開かれました。な

お、両フォーラムの報告書は、それぞれに『人間と文明のゆくえ—トインビー生誕100年記念論集』（秀村欣二監修，吉澤五郎・川窪啓資編，日本評論社，1989年）および『文明の転換と東アジア—トインビー生誕100年アジア国際フォーラム』（前者同様の監修・編集，藤原書店，1992年）として出版されました。いずれも、トインビー思想の現代的な息吹と重要性を再吟味するものとして、内外にわたり大きな反響をえました。

ところで、前者の『人間と文明のゆくえ』の巻頭には、まず特別寄稿としてL.トインビーの「父の思い出—人間トインビーを語る」およびマクニールの「アメリカにおけるトインビー評価」等を取っています。同時に、その全体にわたる目次には、トインビーの肖像を刻む「三つの柱」を掲げています。すなわち、Ⅰ. 歴史家トインビー Ⅱ. 国際政治学者トインビー Ⅲ. 求道者トインビーです。いわゆる、たんに大歴史家の顕彰に留まるのではなく、その知的全貌の精華と今後の課題を多彩に論究したものです。そのトインビーの知的挑戦とは、一体どのようなものでしょうか。

Ⅱ. トインビーの知的挑戦 — 「三つの諸相」から 歴史家トインビー— 「20世紀最大の歴史家」として

つぎに、トインビーの知的探求とその遺産について、とくに「三つの諸相」から省みましょう。まず、第1に「歴史家としてのトインビー」です。トインビーは、世に「20世紀最大の歴史家」とも称されます。もとより、トインビーが「最初の愛」を捧げ学問は、伝統的な「古典古代」（ギリシア・ローマ）です。彼は、オックスフォード大学で古典教育の厳しい修練を積み、その俊英として将来を嘱望された学徒の一人でした。ちなみに、ギリシア古典文学の大御所として名高いギルバート・マレイは、かれの恩師であり岳父にあたります。



アーノルド・J. トインビー
(1889 - 1975年)

しかし、トインビーの学的探求は、旧来の専門的な規範をこえて、文字通りの「全ギリシア史」を鳥瞰するものです。皆さんの中には、大学で「ギリシア史」を専攻された方もおいででしょう。参考までに、これまでの研究動向をのぞいてみましょう。まず、旧来の時代区分法では、「ギリシア」と「ローマ」を明確に区分します。さらに、そのギリシアは古典期以前とヘレニズム時代に、またローマは共和制期と帝政期に細分化されて、時には別の研究領域ともなりかねません。トインビーは、少なくともこのような「三部法」をこえる全体的な見地と、現代的な関心に立っているといえましょう。その意味で、古典古代から近・現代史におよぶ、それこそ4千年にわたる全ギリシア史を熟知した「稀有な学者」であったといえましょう。

さらに、その自己革新ともいえる知的挑戦は、かつて「永遠の規範」とも賛美された観照的なギリシア観とも袂別します。やがて、第一次世界大戦の体験は、激動する現代史への開眼となり、新たに広大な「世界史」への道をひらく礎石ともなりました。ちなみに、日本の「西洋古代史」

を代表する秀村欣二氏は、トインビー文献の翻訳を手がけながら「ギリシア・ローマ史に対する広い視野と新しい観点を得たことは、まことに幸せであった」と回想しています。

他面、トインビーの記念碑的な大著『歴史の研究』（全12巻、オックスフォード大学出版局、1934-61年）は、世に「20世紀の名著」とも謳われます。つねづね、本を著すということは、なにか著者の心を駆りたてる激しい情熱や強い目的を秘めるものでしょう。その意味で、トインビーが、第一次世界大戦中のさなかに体得した「トゥキュディデス体験」（1914年）は重要な鍵となります。この思いがけない体験は、眼前に広がる高度な「文明の破局」と危機の本質において、遙か古代の「ギリシア・ローマ文明」と現代の「西欧文明」も同時代にある、という深い歴史的な洞察です。いわゆる、これまでの年代学的な把握をこえる、諸文明の「哲学的同時性」の発見です。ここに、トインビーの新たな「世界史学」への開眼が見られます。

このように、トインビーが育む『歴史の研究』の構想には、これまでの過去に逃避しがちな出来合いのアカデミズムと訣別する、新たな歴史的危機との「主体的な対決」がひそんでいます。さらに、伝統的な近代歴史学に巣くう西欧中心主義をこえる、人類史の「全体的な考察」が息吹いています。そこに、かつて巨匠E. トレルチが予言した「新しい世界史学」ともいえる、今日の壮大な「比較文明学」の道が築かれることになります。ちなみに、晴れの「第一回・国際比較文明学会」（1961年、ザルツブルク）では、とくにトインビーもその先達として招聘され、新たな理論的指導者としての大役を果たしています。きっと、真なる世界史への希求は、たんなる博識をこえる偉大な精神から生まれるものでしょう。折にふれ、トインビーを評して、大方の歴史家以上の価値を付した「偉大なる思想家」と顕彰されるゆえんでもあります。

総じて、トインビーの歴史観は、伝統的な近代史学にひそむ過度な「西欧中心史観」や「史料中心主義」の反省から、新たに世界史的な立場にたつ普遍的で実践的な探究を旨としたものです。その、現代史学上の挑戦と貢献は大きいといえましょう。

国際政治学者トインビー — 「現代の良心」として

トインビーの知的挑戦として、その第2は「国際政治学者としてのトインビー」です。じつは、トインビーには「歴史家トインビー」という顔とともに、もう一つの「国際政治学者トインビー」という顔があります。この点については、まだ日本では一部の専門家をのぞいてあまり知られておりません。トインビーには、同時に雁行する「二つの主著」があるともいえましょう。その一つは、先ほどの有名な『歴史の研究』であり、他の一つは『国際問題大観』（オックスフォード大学出版局、1925-1956年）です。とくに後者は、イギリスの高い権威が付される「王立国際問題研究所」（チャタム・ハウス）の年報です。おもに、激動する現代の国際情勢を総合的に分析し、学術的に研究することを目的としています。なお、一言加えますと、戦後日本の外交政策に大きく寄与した「日本国際問題研究所」（1959年設立）は、この「チャタム・ハウス」を模範にしたものです。その初代所長を務めた国際政治学者の神川彦松氏は、いち早く比較文明学の大家としてトインビーに注目し、その「偉大な構想」に賛辞を贈っています。

もとより、トインビーと国際政治のかかわりは深いものがあります。彼は、オックスフォード大学を卒業後、一時母校（バイリオル・カレッジ）のチューターとして古典古代史の指導にあたります。しかし、その後イギリス外務省に移籍して、名高い政治家および政治思想家でもあったブライス卿の助手をつとめ、のちに調査部長を歴任しています。その間、若くしてイギリス代表団の一員となり、歴史に名をとどめる第一次世界大戦後の「パリ講和会議」（1919年）や、第二次世界大戦後の「パリ講和会議」（1946年）にも出席しています。このように、トインビーは、現実の生きた国際政治の舞台で貴重な経験をつんでいます。しかも、その歴史的な洞察にとむ提言は、つねに大きな感動と高い評価を得るものでした。

他方、1925年にはロンドン大学の国際史研究教授をかねながら、チャタム・ハウスの研究部長に就任しています。それ以来、名高い「年報」の総責任者として、自ら巻頭を飾る「序文」や長大な「総論」を執筆しています。その中でも、とくに第一次世界大戦の結末を解いた『平和会議後の世界』（1925年）や、第二次世界大戦の原因を究めた『大戦前夜』（1958年）等の報告書は、いまや古典的名著として不動の地位をえるものです。まさにトインビーは、チャタム・ハウスの独自の発展につくし、とくに『国際問題大観』の名を世界にひろめた「最大の貢献者」であるといえましょう。

ところで、トインビーの国際政治観とは、一体どのようなものでしょうか。まず基本的な特徴として、つぎの三点をあげることができましょう。第1は、世界史の全体的で包括的な研究を背景としていることです。第2は、国際政治に対する思想的および精神的な究明です。第3は、歴史上の虐げられた人びとへの共感と未来的展望です。いずれも、トインビー史学の「歴史的な関心」と国際政治学の「現在の課題」をむすび、その巨視的な地平から問題の本質的な意味と展望を明かそうとするものです。もはや、現代歴史学のいびつな「史料主義」と袂を分かち、また古典的な国際政治学が唱える「勢力均衡論」とも趣を異にします。その独自の視点と方法は、やがて高次の歴史的知見と哲理に昇華され、未来への深い洞察と道標をそえることとなります。今日、トインビーが、著名な国際政治学論集の冒頭に「国際思想の巨匠」として紹介され、また新たな「国際関係論」の草分けと称されるゆえんでもありましょう。

とくに、晩年におけるトインビーの関心は、人類共同の平和を構築する「世界国家」（世界政府）の創設でした。問題の本質は、なによりも近代国家の「主権」論理を染めた「ナショナリズム」の克服です。トインビー史学の出発点も、じつはその「生身の神」としての独善性と排他性の超克にあった、ともいえましょう。新たな「世界国家」の可能性は、まず歴史上の「分化と統合」という大きな主潮を追跡し、さらに広範な他者共存の事例と検証から解明されます。

とくに、その上部構造をになう新しい市民層として、これまでの国家群をこえる「ディアスポラ」（離散民）に注目しています。いわゆる、近代の社会構造を支える「垂直的」な構造から、人類共生への横断的な連携を育む「水平的」な構造への転換です。今日の事例で申せば、国家や国境をこえて活動する職能別NGO（非政府組織）ともなりましょう。このような着眼は、いかにもトインビーらしい歴史的な慧眼です。現在、文字通り全世界に拡散する「地球的問題群」の

脅威のもとにあります。トインビーがいち早く提示した「世界国家」の構想は、まだ青写真とはいえ、きっと未来社会を先導する豊かな源泉ともなりましょう。

総じて、トインビーの国際政治観は、従来の「現実主義」(リアリズム)と「理想主義」(リベラリズム)という断層をこえて、新たな総合的視点と高い精神的規範を示したものです。その、国際政治学上の論争を高次に導いた実績は大きいといえましょう。

求道者トインビー — 「歴史家の靈感」と苦悩

さらにトインビーの知的挑戦として、その第3は「求道者としてのトインビー」です。よく、トインビーの面影として、やや宗教的な色彩に染む「形而上史家」(メタヒストリアン)と称されることがあります。また、その知的履歴として「三つの時代」があげられます。いわゆる、アメリカの著名な政治学者K・W・トンプソンが名づける第1期の「ナショナリズムの時代」、第2期の「文明の時代」、第3期の「宗教の時代」です。かねがね、創意を秘めた知的開拓者の歩みには、いくどかの象徴的な転機を見ることができましょう。トインビーの場合も、その例外ではありません。そこで、トインビーに冠せられる「宗教の時代」とは、一体どのように捉えるべきでしょうか。

一まず、主著の『歴史の研究』に照らして観察しましょう。たしかに、その第1巻から6巻(1934-39年)までは、大まかに見て「文明中心」の考察です。その後の第7巻以降(1954年-)は「宗教中心」の探求であった、ともいえましょう。一部には、その主題の逆転を指して「新しい著作」と評されたこともあります。しかし、その背景には、ちょうど第二次世界大戦の深刻な危機を体験し、新たに人類文明史の命運と人間実存の根本的な意味を問うトインビーの苦悶の姿があります。なお、このような宗教的な意味解釈と価値判断は、その後の「トインビー批判」を誘う一拠点ともなりました。

他面、トインビーの著作には、宗教を直接ないし間接の主題とする多くの作品があります。その代表例として、たとえば名著の誉れ高い『一歴史家の宗教観』(オックスフォード大学出版局、1956年)をあげることができましょう。この本は、トインビーが、由緒あるエディンバラ大学(イギリス・スコットランド)の有名な「ギフォード・レクチュアズ」に招かれて行った講演集です。ちなみに、この記念講演会は、世に「宗教学のノーベル賞」とも目されるものです。その折は、とくに、一歴史家としての宇宙観を虚心に語りながら、これまでに達成した宗教的な遺産の全貌と、その本質にもとる「負の遺産」を問うものです。トインビーが、あえて自己批判をもってのぞんだ「宗教的寛容」の問題は、今日の深い「精神的な断絶」に橋を架ける重要な鍵ともなりましょう。

この他にも、トインビーの論考には、しばしば伝統的な歴史学になじまない独特の概念や用語が登場します。たとえば、宗教的なニューアンスにとむ「歴史家の靈感」をはじめ、「試練」や「出会い」あるいは「挑戦と応戦」といった言葉が見られます。また、諸文明の法則的な運命をつむぐ「循環説」的な見地は、むしろ仏教の「輪廻思想」に一脈通じるのではないのでしょうか。

ところで、トインビーの宗教観は、つねに歴史上の「文明」との相互関係から考察されるのです。いわゆる、一文明の自己完結性という妄信をこえる「文明変動論」の構築です。その広い視座から、世界的な「高等宗教」の成立や、その歴史的な機能といった重要問題を解くこととなります。たとえば、キリスト教や仏教の誕生および展開についても、その歴史的な背景をなす「文明の出会い」が前提となり、またその高次の役割は「文明の超克」という視点から検討されます。その場合でも、トインビーの意図は、あくまでも文明から宗教への「重心の移動」を示すものです。まして、神学上の「護教論」に組するものではありません。

トインビーの知的探求には、じつは「二つの側面」があります。いわゆる、経験科学として歴史研究にいそしむ「学者」としての側面と、超越的な実在に真摯に向きあう「求道者」としての側面です。いわば、学問と信仰のはざまに揺らぐ知的苦悶と高次の精神的緊張感が、逆に独自の歴史的な慧眼と深遠な洞察を育む、ともいえましょう。その「自己の真実」を告げる心情は、最晩年の著作となる『暗中模索』（1979年）の手記に読みとることができましょう。

さらにトインビーは、現代宗教の課題として、真理の独占権を排する「開かれた救済」を説いています。ちなみに、これまで人間の自由意思によって洞察された「神」の啓示は、わずかに究極的な実在の一断面を投影するにすぎない、ともいえましょう。かつて、異教を奉じて追放されたローマの統領シンマクスは、「かくも偉大な神秘の核心は、ただ一つの道をたどることによっては到達しえない」という言葉を後世にのこしています。今日、現代神学の課題としても、自己中心的な「宗教排他論」から、他宗教との対話と共生を旨とする「宗教包括論」への転換が求められています。21世紀の「地球文明」にかなう諸宗教の命運は、いち早くトインビーが指摘し、それこそ愛と慈悲の心を求めた「シンマクスへの応答」にあるともいえましょう。

総じて、トインビーの宗教観は、一歴史家として「形而上学」と「経験主義」のはざまに苛みながらも、新たな歴史的地平の拡大から「宗教多元主義」への道を開いたものです。その、現代神学上の新しい可能性を提示した意味は大きいといえましょう。

比較文明の旅路から — 「聖なるもの」の普遍性を求めて

このところ私自身も、比較文明学の一環として新たに「巡礼文明論」をかかげ、足しげく世界の「聖域」を巡り歩いています。いわゆる、歴史的な宗教行動としての巡礼を、できるだけ全体論的な視座から再考したい。とくに、人類の心性に通底する「象徴記号」の本質を解読したい、との思いです。その実践的な課題は、世界史上におりなす「宗教間の対話」への旅たちとして、できるだけ人類の共有遺産である「多様な共生」の風景を描き、未来世代につなぐ「希望の小途」を築くことです。

その一景観として、たとえば西洋美術の原像となる「ロマネスク美術」（10世紀末—12世紀）の誕生問題があります。いつともなく、ヨーロッパ巡礼の旅路でも、ロマンと幻想を秘める「ロマネスクの美」に魅せられた多くの若者たちと出会ったりもします。ところで、この「ロマネスク美術」は、一連の「巡礼路様式」として、フランスからスペインに向かう「サンティアゴ

巡礼」の目的地・コンポステーラ大聖堂をモデルとしています。他面、その源泉には、東方オリエントの豊かな遺産を秘めた「モサラベ美術」（9世紀末—11世紀）の水脈が延々と流れているのです。

すでに、西洋美術史の巨匠であるエミール・マールが指摘するように、少なくとも西方の「キリスト教美術」をよく理解するためには、その東方の源泉に遡らねばならない。いわゆる、日本美術史界を代表する吉川逸治氏が説く「東方キリスト教美術」や、柳宗玄氏の説く「アジア的キリスト教美術」の視点も不可欠でしょう。私自身は、いわゆる「オリエントのキリスト教」として、そのシリアからの「文明移転」問題を追跡しています。

ここに、壮大な「比較宗教学」の道をひらいた M. エリアーデの命題が蘇ります。すなわち、これまでの未開宗教をおとしめるような「進化論的な仮説」や、キリスト教的な一神教の神観念を頂点にいたく「西欧中心主義」を脱却することが必要です。エリアーデの究極的な目標は、人類史の心性にひとしくやどる「聖なるものの普遍性」の定立と立証にあります。私自身の旅路も、洋の東西にわたる「聖なる美」の回廊を踏査しながら、その深層に響きあう宗教美術の根源性と普遍性を訪ね歩くこととなります。いくぶん、話題は「旅物語」にそれた感もありますが、またその話はつきないのですが、一まずトインビーの宗教観に照らした私なりの一検証でもあります。

ところで、先ほどにみたトインビーの「三つの知的諸相」は、同時に現代への挑戦となる「三つの革命」に連動するものでしょう。すなわち、第1のトインビーの歴史観は、いわゆるイギリスの著名な歴史家 B. バラクラフが指摘する「視野の革命」として、まさに日本で論議の渦中にある「歴史認識」の問題につながります。第2のトインビーの国際政治観は、強国支配の近代国際法こえる「思考の革命」として、異なる他者と弱者をつつむ「正義と公正」の思想に昇華されましょう。第3のトインビーの宗教観は、自己中心的な真理の独占権を排する「価値の革命」として、宗教的な寛容をうながす「開かれた救済」の啓示ともなります。このように、明日の「地球文明」への希求として、トインビーがつむぐ三位一体の価値観と実践の道が、いま大きく問われることになりましょう。

Ⅲ. トインビーと日本人との対話 — 「記念碑的な著作」を読む

トインビーと日本 — 「カルタゴの運命」への警告

トインビーは、世界の知識人のなかでも、とりわけ日本に深い関心と期待をよせた一人でした。また、大の親日家として、1929年に訪日して以来、1956年と1967年の三度にわたって日本を訪問しています。その後、晩年にいたるまで、日本人の心と自然をこよなく愛してやまなかつた、といえましょう。その最初の訪日については、いまや知る人も少なくなりました。それは、京都で開催された「太平洋問題調査会国際会議」（1929年）にイギリス代表団の一員として出席したものです。

すでに、トインビーの名は、その当初より新進気鋭の歴史学者および国際政治学者として世界的に知られていました。なお、その国際会議の主題は、日中間の激しい対決をみる「満州問題」

でした。その折に催された「公開講演会」において、トインビーは多くの聴衆を前にして、歴史的な含蓄にとむ格調高い講演を行っています。すなわち、日中双方にみる絶対主権の主張と、その国策の具となる戦争の危険性を指摘し、とくに日本がかつて自滅の道をたどった「カルタゴの運命」の轍を踏まぬように、と警告しているのです。あらためて、その後の「満州事変」にいたる日本の不幸な命運に照らして、トインビーの大局的な見地と歴史的な洞察に注目したいものです。なお、その国際会議に出席した松本重治および蠟山政道両氏の体験談とトインビー観は、まさに正鵠をえて感動的なものです。

他面、日本では、すでにトインビーの著『歴史の研究』（全12巻）の完訳をはじめ、主要な著作もほぼ出そろっています。幸いにも、トインビーの思想に親しみ、新しい道を切りひらく知的土壌と良き理解者を得たともいえましょう。さらに、最晩年におけるトインビーの思索は、とくに「日本人との対話」に向かうものでした。申すまでもなく、人間が他者と交わす「対話」は、共に生きる知恵を学び、相互理解と信頼の道を深めことになりましょう。古来、「対話」の試みは、名高いソクラテスの対話を始め、真理探究の理想として、あるいは諸学の根本学としても重視されました。今日、とりわけ高次の自己変容に向けて、また多様な他者と文明をつなぐ共生の調べとして、創意と共感の奏でる対話の意義は大きいといえましょう。ここで、トインビーと日本人の対話として、とくに代表的な対談者の肖像と記念碑的な著作を垣間みましょう。

「トインビー研究」への挑戦 — 山本新と『トインビー』

山本新氏（1913-80年）は、名実ともに日本におけるトインビー研究の先達です。また、トインビーが先導した壮大な「比較文明学」の重鎮として知られます。その鋭い問題意識と独創的な成果は、いわゆる「山本文明学の三部作」という大著に見ることができます。すなわち、『文明の構造と変動』、『トインビーと文明論の争点』、『トインビー』の三著です。いずれの作品も、新たにトインビー研究の扉を大きく開いた名作と申せましょう。

第一作の『文明の構造と変動』（創文社、1962年）は、新たにトインビーのメッセージを日本につたえ、その思想的な核心と学問的な息吹を示したものです。そのおもな内容は、まずトインビーを中心とする一連の学的系譜と思想体系をたどります。さらに、基本的な問題群として、たとえば近代「西洋化」の波にゆれる非西洋文明の苦悩や、外来宗教の土着化に悩む心の葛藤等が、独自の着想をそえて考察されます。とくに、最終章の「トインビー批判の検討」は、未知の大海に漕ぎ出すトインビーの挑戦として、その真価を見きわめる貴重な羅針盤ともなりましょう。本書は、日本における本格的な「トインビー研究」および「比較文明学序説」として、新たな開眼を誘う記念碑的な著作であるといえましょう。

第二作の『トインビーと文明論の争点』（勁草書房、1969年）は、トインビーをめぐる学界の最新成果を総括し、山本氏自身の独創的な応戦を記録したものです。とくに、伝統的な歴史観に巣くう「大文明主義」を批判し、トインビーの新作である『再考察』（1961年）も吟味しながら、新知の「周辺文明論」を定立したものです。すなわち、世界史上の不条理な余白を埋

める作業として、大文明の谷間にひそむ小さな周辺文明にもひとしく光をあてる。さらに、新たな世界史的な定位と命運を探求するものです。そこに、本書の中心課題ともなる「日本文明の位置づけ」が浮上します。その検証は、日本史上の誕生問題を解く「中国化」と、近代化の明暗を刻む「西洋化」の総体的な反省ともなりましょう。さらに、現代日本文明の世界史的な定位と新たな使命を問うものです。本書は、自らトインビー研究の国際的な論陣にくみして、新たに学問的な展開と命題を授けた「画期的な労作」であるといえましょう。

第三作の『トインビー』（講談社、1978年）は、トインビーの死（1975年）を契機としています。その追悼の念をこめて、今後の望ましい研究課題と使命感を明示したものです。ちなみに、トインビーは晩年の死にいたるまで、世界的な名声に溺れることなく、たえず自己吟味と自己革新に心をくだいてきました。その生涯にわたる思想的な歩みは、山本氏の新しい創意と探求を誘うだけでなく、新たな「比較文明学」の誕生をうながすものでした。それだけに、いま「全トインビー」の検証と解明が急務とされたのです。いわば、山本氏が、トインビーの全生涯の重みと対峙する内的折衝の姿が、全編にみなぎっています。とくに、将来の「一つの世界」におよぶ構想は、独自の「インテリゲンチヤ論」や「ディアスポラ論」等を交えて圧巻です。本書は、まさに「トインビーをどう継ぐか」という至上課題に挑む、山本氏とトインビーとの真摯な「格闘のドキュメント」であるといえましょう。

本来「良き弟子」とは、先達としての師の薫陶を仰ぐとともに、その自立と超克をも秘めるものでありましょう。山本氏の業績は、知的巨人としてのトインビーに挑戦しつつも、その思想を日本に根づくような形で導入し、さらに新たな「比較文明学」に架橋して大成した点にあります。他面、自ら激動する社会と学問の不断の交流にも身を挺したともいえましょう。今日、日本における「文化NGO」の草分けともされる「トインビー・市民の会」（現「トインビー・地球市民の会」）の誕生も、山本氏の献身的な尽力に負うものです。総じて、山本氏が、まさに暗夜にかがやく彗星のように登場し、トインビー思想を日本の土壤に導き、さらに発展させた功績は大きなものがあります。

私的な一文を付せば、私の第一作となる『トインビー—人と思想』（清水書院、1982年、「新装版」2015年）の刊行は、じつは恩師山本氏の推挙によるものです。まさに、トインビーと山本新氏という「偉大なる師」との遭遇は、私なりのたゆとう小船を大海に誘う遙かなる道標ともなりました。

若い世代への「遺言の書」— 若泉敬と『未来を生きる』

若泉敬氏（1930-1996年）は、国内外にわたる第一線の国際政治学者として知られています。事実、当時のアメリカ政府首脳や代表的な知識人との親交も深いといえましょう。ところで、トインビーとの縁は、若泉氏が奉職する京都産業大学によるトインビーの招聘（1967年）によるものです。いわゆる、トインビー訪日の全般にわたる諸準備の大役を果たしたのが、他ならぬ若泉氏であったのです。また、トインビーの一ヵ月余におよぶ滞在中は、身近な世話

役として全行程を共にし、日々その聲咳に接することになります。そのトインビーの印象について、とくに「人格および思想においても非常に優れており、人間として完成の域に近づいた人物」と評しております。若泉氏自身、トインビーを終生「心の恩師」と仰ぎ、私淑の念はきわめて深いといえましょう。じじつ、若泉氏の評伝（『沖繩核密約』を背負って—若泉敬の生涯』、2010年）の一隅には、「A・トインビーを慈父として」という一節がひそかに収められています。

その後、若泉氏はトインビーとの親交をかさねながら、ついに両者による「対話」が実現します。この発案は、若泉氏によるもので、当時（1960年代）世界を席卷した大学紛争を背景としています。とくに、学生の激しい「異議申し立て」は、たんなる「世代の断絶」をこえる現代文明の本質的な問題がひそむかのようです。トインビーは、病後の身でありながら、この対話に大きな情熱をそそぎ、最善の準備をもつてのぞんでいます。その全容は、毎日新聞紙上に異例ともされる長期連載（全97回）となり、一般読者の大きな反響を呼びました。その後、単著『トインビーとの対話—未来を生きる』（毎日新聞社、1971年）および『続・未来を生きる—トインビーとあなたとの対話』（同、1971年）として刊行されました。さらに、文庫本および英語版としても出版されています。

ところで、本書の主題は、その原題が示すように「未来に生きのこること」となります。いわゆる、激変する現代社会の分析と未来の見通しが中心となります。そこでは、核戦争を回避する「世界政府」の構想から、今日の「安楽死」の問題まで広範にわたる疑問点が討議されます。とりわけ、今日にみる歴史的な偏見をこえ、しかも誠実に答えようとするトインビーの姿は感動的です。その根底に、トインビーの貧しい多数派への共感と救済への意志を見ることもできましょう。他面、現代社会のひずみとして、大きな「三つの断絶」が提示されます。それは、「倫理、文化、世代間」上にみるギャップです。その、人間の奢りにみる深い社会的な亀裂と心の溝を埋めるには、何よりも現代の価値観を問いなおすことが必要でしょう。

まず、第1章の「今日の生きがい」では、人生の究極的な目的にふれています。そこでは、有名な「愛と英知と創造」という言葉が登場します。当時は、一種の流行語になった感もあります。ところで、この冒頭を飾る「愛」とは何でしょうか。それは、たんなる喜びや満足といった情念とは異なるものです。いわば、まことに難題ですが、人間の自己中心性を放下し、現に「苦しむものと共に苦しむ」という「共苦」（コンパッション）の思想をやどすものでしょう。じじつは、この自己犠牲をも惜しまぬ価値の実現こそ、トインビーの生涯をかけた信条でもあったのです。それは、かつて仏陀やキリストといった世界宗教の始祖たちが説いた道でもありましょう。その希望の光を、トインビーはひそかに東方のアジアに見ていたともいえましょう。

また、最後の第8章「若い世代への期待」は、この対話の核心をしめるものです。当時、社会の全般にわたる加速度的な変化と新たな挑戦は、とりわけ若者に深刻な不安と苦悩をあたえています。その怒れる若者に対して、トインビーの同情と信頼の念は深いものがあります。本書の中でも、たとえばシェークスピアの「こんな世に生まれあわせて、それを直す努めを負わされると

は！」と嘆くハムレットの苦悶や、聖フランシスの「ヒッピー物語」等を引用しながら、励ましと希望の糧を示しています。今日、来るべき未来世代への義務となる「世代間倫理」の道標ともなりましょう。現代の基本問題は、国境をこえるグローバル化世界の中で、幾層もの癒しがたい「分断線」を見ることです。その病理の進行は、民族、宗教、経済間とともに「世代間の断絶」にもせまっています。新たな連帯と再生の道は、つまるところ「人生いかに生きるべきか」という根源的な問題に帰着します。トインビーがのこした「遺言の書」は、いま誰も避けられない「精神的な討議」として、新たな重みをもって蘇ることでしょう。

若泉氏の業績は、まず国際政治学の先鋒として、トインビーの高い条理と大局的な展望を心にとめ、その実践に身を賭したことです。さらに、トインビーとの「対話」は、これまでの一部の専門家や知識人だけでなく、ことに若い世代や一般市民にとっても「身近な存在」として親しむ機縁ともなりました。いわゆる、日本におけるトインビーへの関心と裾野を広げた功績は大きいといえましょう。

かつて私自身も、若泉氏とはよくトインビー論を交えながら、親しくお会いしたことがあります。また、本書出版の直後に催された『『未来を生きる』講演会』（東京、1971年）等でも同席したことから、いま若泉敬氏の高邁な精神と謙虚な人柄も忘れがたいものがあります。

「地球文明」と希望の光 — 池田大作と『二十一世紀への対話』

池田大作氏は、あえて申すまでもないのですが、新たに仏法による価値創造と実践を目ざして創設された「創価学会」（1930年）の会長を歴任し、現在名誉会長でもあります。一門外漢の観察ですが、その根本理念は、鎌倉時代の法華宗宗祖・日蓮聖人に遡るのでしょうか。いわば、仏教哲理の奥義として、仏の「永遠の生命」を基調にし、まず自己成仏と申しますか「自己の幸福」への願いを社会建設につなぎ、さらに「世界の幸福」への祈りに止揚するものでありましょう。ちなみに、池田氏を会長とする「SGI」（創価学会インターナショナル）の憲章には、普遍的な人間主義を礎とする「世界市民の理念」、「寛容の精神」、「人権の尊重」等が謳われております。同時に、非暴力と対話による人類史的な貢献の道を唱えるものです。私も、かつて独自の「価値創造論」として、大変興味深く読んだことがあります。その21世紀の命運を問う「珠玉の語らい」として、異色の「トインビー・池田対談」（1972・73年）が実現したともいえましょう。

もとより、トインビーは、20世紀の代表的な歴史家として二つの世界大戦を体験しています。とりわけ、今日の核兵器の使用や地球環境の破壊等による人類滅亡の暗雲に、強い危機感をいだいています。本来、卓抜な歴史家の使命は、やはり時代の危機と対決する思想家の高みに昇華されるものでありましょう。他面、トインビーは、歴史における宗教の役割を重視しています。その宗教観は、折々に東洋古来の知恵や聖なる遺産にもふれています。ちなみに、歴史的な「世界宗教」の伝播や分類法についても、大乘仏教の「寛容性と包容性」に対する評価は高いものがあります。その中で、新たに日本仏教への関心を誘ったのが、池田氏との「対話」であったともい

えましょう。

このトインビーと池田氏の「対談」は、ロンドンのトインビー邸で二回（1972、73年）にわたり行われました。その対談の記録は、早速『二十一世紀への対話』（文芸春秋、1975年）として刊行されました。さらに、文庫版、英語版としても出版されています。その主題は、トインビーの「一通の書簡」が示すように、より広く「人類が直面する基本的な問題」を討議することです。本書の構成は、すでにご承知のように、第一部の「人生と社会」、第二部の「政治と社会」、第三部の「哲学と宗教」となっています。とくに、第二部（第4章）の原題は「一つの世界」（‘One World’）です。また、その関連テーマとして、「東アジアの役割」、「中国と世界」、「世界統合化への課題」等の問題が並びます。いずれも、世界史の未来を語るトインビーの最終的な見解をおさめたものです。さらに、アジアと日本の命運をかけた「地球文明」への探求としても、きわめて重要な文献といえましょう。

今日、新たな世界秩序として、人類の苦悩と希望を共に分かち「世界政府」の創設は不可避な課題です。とくに、その精神的な視座として、かつて高度宗教の始祖たちが実践した「自己超克の精神」が求められましょう。ここで、池田氏が説く仏教思想に学べば、人間の生命活動として、その過信行為を自制する「中道の精神」や、人間と自然の共存原理を明かす「依正不二」といった法理が、新たに蘇ることになりましょう。あえて加えるならば、仏教の現代的な展開をはかる池田氏の大構想が、トインビーとの対話によって歴史的な発想と内実をそえた意味は大きい、といえましょう。とりわけ、トインビーの弱者への共感と、その歴史的な苦悩と創造性の解釈は示唆的です。

池田氏の業績は、お互いに東西文明の異なる視点を認めつつも、より高次の「人類の共生」という課題に向けて「宗教間の対話」の道を築いたことです。両者の胸襟を開いた「対話」は、広大な歴史的慧眼と深遠な宗教的心眼をむすび、明日の「地球文明」を育む希望の光となることでしょう。先に述べた巨匠マクニールは、とくに晩年のトインビーとアジアの「仏法思想家」との異色対談として、本書に大きな関心を寄せています（『アーノルド・トインビー—その生涯』（「結語」、1989年）。他方、本書は、すでに世界の28言語に翻訳されているとのこと。きっと、新しい「地球文明」の黎明として、世界の知性と良識を育む希望の門出となることでしょう。

ある折は、私自身も「トインビー・池田対談—40周年」を記念する新春特集号に、乞われるままに「地球文明への希望の光」と題する一文を寄せたこともありましたが（「聖教新聞」2012、1・1）。いま、新たに同書の「出版40周年」を迎え、その思想の真価と重みにふれて感慨深きものがあります。

おわりに — 新しい「価値創造」に向けて

ご存知のように、新たな21世紀の開幕は、同時に一種の「恐れと期待」を秘める「第三の千年紀」の誕生ともなりました。とくに、人類文明史の根本的な変容として、現に「病める地球」の暗雲が重くただよっています。もとより、トインビーの存命中には、歴史的な大事件に際

し、あるいは年頭所感として、内外の新聞社がこぞってトインビーの見解をもとめました。最晩年のトインビーは、とくに「1973年の回顧」として、「人類は、豊かな生命圏の『悪しき種族』となる汚名を返上できるだろうか」と問いかけています（『人類と母なる大地』、1976年）。もし、今日トインビーが生きていたら、どんな診断を下すのでしょうか。

今日、いわゆる「21世紀の問題」として、地球全体を覆う「グローバル危機」の問題があります。その前代未聞ともいべき異例の事態は、つまるところ人間の食欲信仰が招いた「負の遺産」とも申せましょう。第一級の宇宙物理学者であるマーティン・ルイスは、広く宇宙的な視点から「人類最後の世紀か？」とも問いかけます。いわゆる、21世紀への警鐘として、新たな「共生価値」の創出と人間知性の転換を呼びかけています。総じて、21世紀の人間環境と申しますか、その文明史的な位相は、ちょうど人類文明史上の「折り返し点」にあると申せましょう。身近なマラソンに例えれば、その「往路」において生みだされた人類の多様な遺産を問いなおし、かつ「復路」において新たに人類を結ぶ「地球文明」との関係性と方位が再考察されることになります。

もっとも、今日の特異な表象は、現代哲学の最高峰と目されたK. ヤスパーズにちなんで「第二の枢軸時代」とも称されます。また、私自身は『新約聖書』に暗示される「第二の黙示録」の時代と呼んでいます。もとより、仏教思想の運命的な歴史観である「末法思想」や日蓮聖人が説く「法華宗」の本旨にも、一脈通じるものがあります。いずれも、人類史上の精神的な開眼として、人間の根源的な反省と自己超克を呼びかけるものです。身近に、今日の「ポスト・グローバル化」の時代に照らせば、まず人間の奢りやモノ優先の「成長神話」から自己を開放し、さらに新たな生きがいとなる「幸せの尺度」を再構築することです。

とくに、新たな「地球文明」の自己変容として、まず「文明と価値」の再定義が問われることになります。現実には「文明の転換」問題は、当然のことながら、その存在根拠となる「価値の転換」問題に負うともいえましょう。いわゆる、21世紀の「文明・価値変動論」として、これまでの一元的な価値理念を修正し、それこそ生態系から文明系にいたる多面的な見方や共生価値の創造が不可欠となりましょう。

このような、21世紀の「最重要な課題」とその施策は、まず現状において、国連の「国際年テーマ」やユネスコの「世界宣言」等に見ることもできましょう。すなわち、「国連」が主導する「文明間の対話」（2001年）や「人間共通の価値観」の構築に、また「ユネスコ」が提示する「文化の多様性に関する世界宣言」（2001年）や「文化的な通底価値」の提唱等です。いずれも、新たな人類世界の構築と平和への証として、とくに民族や文明・宗教の壁をこえ、またすべての人間の尊厳を説くものです。

その他、私なりの独自の問題関心もあります。たとえば、とくに20世紀の「戦争の世紀」と決別する「セビアラ声明」（1986年）の再評価をはじめ、病める「地球環境問題」に新地平をひらくM. セールの「自然契約論」と伊東俊太郎氏の「地球的文明史」の構想、さらに未来世代と「母なる地球」への遺言ともなるトインビーと地球倫理の先覚者・J-Y. クストーとの

「未完の対話」等があります。今日は、時間の関係上、もはや十分に語りつぐいとまもなく残念です。

さいごに、21世紀への「希望の知」は、つぎの「三つの価値志向」によって導かれることでしょう。第1は「未来への志向」であり、第2は「他者への志向」であり、第3は「共生への志向」です。トインビーは、他ならぬ宇宙における「人間責任」として、いち早くその総体的な理念の構築につとめ、自らその三者をつなぐ「三位一体」の価値体現者であった、といえましょう。果たして私たちは、このトインビーが遺した「最後の挑戦」にどう応えるのでしょうか。ここに、一人の人間として、それこそ「広い視野と慈悲の心」にとむ「地球市民」（グローバル・シティズン）の発揚として、新たな自己発見と価値創造の道が問われることになりましょう。かつて、「ノーベル平和賞」（1997年）受賞したマザー・テレサは、身をもって「一粒の麦」として自分が変わること世界も変わる、ことを明証しました。

いま、新たに21世紀への船出として、「いずこへ行くか、われら？」との命題が身近にせまっています。まさに、本日のテーマに掲げた「生への選択」と希望の道が問われることになります。こよなく日本を愛したトインビーとの「対話」は、きっと明日への針路を照らす豊かな源泉ともなるでしょう。あらためて、希望のそよ風として「今こそ、トインビー」との感を深めます。今日は、短い時間でしたが、とくにトインビーが大きな期待をよせ、また未来世代の主役となる皆さんとお話できました。私なりに、未来を生きる希望のよすがともなり、心から嬉しく思いました。有難うございました。

（比較文明学会元会長、トインビー・地球市民の会 特別顧問）